

生活 & 総合 navi

vol.75 OCTOBER 2018

[特集]
生活・総合は
おもしろい。(後編)



[連載]

Belief

カリキュラムマネジメントゼミ

アクティブ・ラーニング教室

研究と実践

ご当地情報局

生活・総合への提言

保育所・幼稚園の現場から

生活科を理科とつなぐ・社会科とつなぐ

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



あなたの色鉛筆を増やしてごらん

タレント

サヘル・ローズ

Sahel Rosa

1985年、イラン生まれ。幼少時代を孤児院で過ごし、8歳で養母と来日。様々な苦難を乗り越えながら、高校時代から芸能活動を始め、テレビ、ラジオ、映画、舞台と幅広く活動を展開。国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務め、第9回若者力大賞を受賞。



柔軟性と調和、 責任感を学べる教育に

生きる希望を失いかけたことも

私は8歳の時に養母とともに日本に来たのですが、イランでは「おしん」が放送されていたので、日本には、おしんの様な方が沢山いるのかと思っていましたが、とても近代的で、ゴミ一つ落ちてなくて、キレイでびっくりしました。

通っていた小学校の校長先生に日本語を覚えてもらい、住む家や母が仕事に困っていた時には、給食のおばちゃんに助けられました。日本の方には、本当に親切にしてくださいまして。

当時は「イラン人」ということだけで、学校でイジメも経験し、一度は生きる希望を失いかけたこともあったのですが、自分を犠牲にしてまで、私のために生きてくれている母を幸せにすることが、私が生かされている理由の一つだと考えるようになりました。

悩める子どもたちに 夢を与えられる存在になりたい

私自身、子どもの頃から色々なことがありすぎて、自分の感情を

表に出せなくなり、大人になれないインナーチャイルド（内なる子ども）をずっと抱えてきたので、

唯一、表現というフィルターを通して、言葉や感情が自然と表に出せて、違う人格の中で隠れていた自分を出すことができると気がきました。なので、今、もっとも夢中になっているのは、演じるお仕事を通して「表現」を磨くことです。そして、養子として私を育ててくれた母に恩返しをしたいので、女優として、もっと多くの人に私という存在を知ってもらおうことで、母の名前を歴史に残したいと思い、頑張っています。

最近では、社会的な活動にも積極的に取り組んでいて、国際人権NGO「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」の親善大使として、すべての子どもたちが家庭と夢をもてる環境づくりの大切さを訴えています。将来は、母国に「サヘルの家」という孤児院をつくることを目標に掲げているのですが、日本にも600以上の児童養護施設があって、約4万7000人もの子どもたちが暮らしています。私も孤

児院で生活していたのでよくわかりますが、大人数で生活すると、大人たちから愛情をそそいでもらえる機会は限られてしまうので、同じ境遇に悩む子どもたちに夢を与えられる存在になれたら嬉しいです。

日本の子どもたちへ

私が日本の教育の中で感じたことは、個性を出すことがあまり自由ではなかったということです。また、自分の意見がみんな必ずあるはずなのに、うまく表現できずに飲み込んでしまう。これからの日本にはディベートができる教育が必要だと私は感じています。ディベートで、否定的になつて欲しいのではなく、相手の言葉を聞きながら、自分の言葉ももった社会人になつて欲しいのです。柔軟性と調和、そして責任感を学べる教育が次の世代の財産です。

「まわりの言葉も大切だけど、自分自身の思いや考えを大切にしたいんだよ。」

あなたの人生はあなたのためでもあるからね、楽しみながら迷いながら道を開拓して欲しい。あなたにしかできないことがあるし、あなただから出会う一期一会もあります。他人は他人。あなたはあなたの色鉛筆を増やしてごらん。」

生活・総合のトップランナーは授業づくりの際どんなことを考えているのか。
それぞれの先生が図に表し解説します（ARで動画も公開しています）。

対談

生活・総合はおもしろい。



Ogasawara Sachie

Suzuki Akinori



Mita Hiroki

Suzuki Noritomo

後編

新学習指導要領全面実施を控え、

平成30年4月より先行実施期間が始まった。

生活科・総合的な学習の時間はどのように変わっていくのか。

前号に引き続き、現場でご活躍の4人の先生方に

「生活・総合のおもしろさ」を熱く語ってもらいました。

子どもたちが教師の想定を超える瞬間とは？

授業づくりの際の「頭の中」も紹介します！

取材日／2017年11月11日

三田 先生方は、これまで生活や総合の時間で子どもが「本気になって取り組む姿」をたくさん目にしてきたと思います。エピソードを交え具体的に教えていただけないでしょうか。

小笠原 生活科は、子どもたちの身近なところから学習が始まるので、大きなことももちろん大切ですが、小さなことでも毎日の生活の中で、自分ごととして考えられるようになったり、生活の一部になったりしたときに「本気になった」と感じます。

三田 「小さなことでも」とはどういうことでしょうか。

小笠原 例えば、野菜を育てていて枯れてしまいうようになったときに本で必死に調べていたり、野菜博士に真剣に相談していたりして「本気になった」と感じることもあります。もっと日常の小さいようなことでも「本気になった」と感じます。現在勤務している学校は校舎の構造上、自分の好きなタイミングで水やりに行けないの

ですが、私が何も言わなくても、子どもたちの方から「先生、水やりに行かないと大変！」などと言ってきました。子どもの生活の一部になり「本気になった」と感じて嬉しくなります。

三田 確かに大切に育てている野菜がこのままでは枯れてしまうわけですから、子どもにとって本気にならざるを得ない切実な場面ですね。

小笠原 「そうだった！よく覚えていたね」というように、自分ごととして考えて行動しようとする姿を称賛する感じですね。私の方が忘れてしまいうことになるので多分、子どもたちは、「先生は忘れそうだから、自分たちが忘れないようにしないと！」と思っ

ていると思います。それから、「自然や物を使った遊び」の単元で素材遊びの時間の振り返りに、楽しそうに遊んでいた2年生が、「昨日は、〇〇をしたらこうなって、今日は〇〇をしたらこうなりました。これはもう、

日常の中で「本気」になれることを課題に。

遊びではありません。研究です」と書いていて驚きました。「自然の不思議さなどに気付いてほしい」という思いももちろんありますが、「身の回りの物で楽しく遊べることに気付いて、生活を楽しく豊かなものにしてほしい」と思って授業をしていましたので。

三田 「本気」の積み重ねが、教師の想定をはるかに超え、結果的に内容(6)のねらいを達成することにつながったわけですね。様々な状況や場面によって生じる問題が、子どもの思いを奮い立たせ、「○○しなければ……」とか、「○○したい」という、明確なめあてや行動を引き出すのでしょうか。

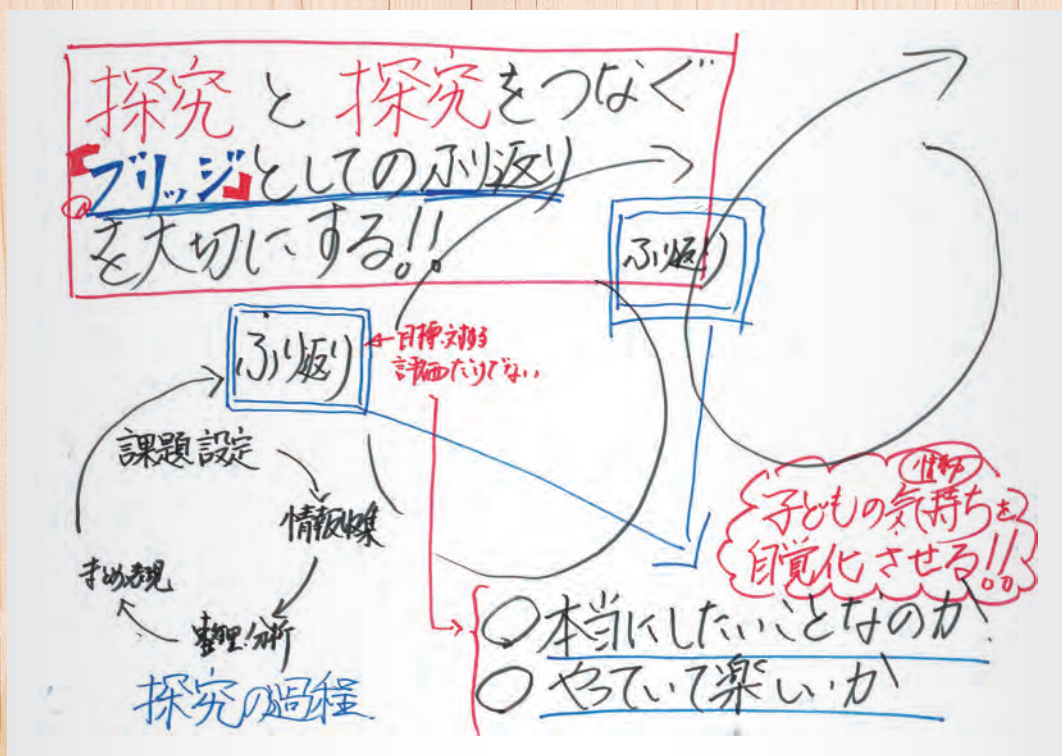
鈴木紀知 以下鈴木(紀) 生き物や植物をちゃんと成長させたいとか、おもしろく動くおもちゃをつくりたいとか、「やりたいこと」が明確だと子どもは、「できないこと」も明確にもつことができる。でも、やりたいことが自覚されていないと、自分が今壁にぶち当たっている、ということにも、いまいち気付けないという気がしますね。

うちのクラスでは、高齢の方に健康になってもらいたいという想いで、ニュースポーツを自分たちで考案して、地域の福祉施設で高齢の方々と交流する中で改善しようと活動していたんです。その中

で、子どもたちは4チームに分かれてスポーツをつくって、一度体験してもらって、感想をもらおうと考えたんです。でも、一回交流しただけでは、自分たちの欲しい情報が得られないんですよ。それで、「すること」という、学習活動の計画としては、体験してもらってアンケートを書いてもらいさえすれば、成立するわけで、そこまでやれば活動としては、終わりにしてOKのはずなんですけど、どうやらアンケートに答えてもらっている内容が、自分たちの想いと違うな、知りたいことに十分に答えてもらえていないな、と感じると、子どもたちは、当初の計画を超えて動き始めるんですよ。

例えば、しゃがむ動きが健康になるだろうということで取り入れたけど、痛くて辛くてやりたくないんじゃないかっていう不安がわいてくる。そうすると、「私たちはこういうつもりで、こういう動きを入れてるけど、大変じゃないですか?」と自分から高齢の方々に、想定していなかったことまで聞きにいったりするんです。しかもそれが、普段そんなに積極的じゃない子だったりするんですよ。

それは、「すること」としてのアンケートという学習活動の先に、「やりたいこと」としての、健康



探究がスパイラルに高まっていくために、「探究と探究をつなぐ」ブリッジとしての振り返りを大切にしています。この振り返りは目標に対する評価だけでなく、本当にしたいことなのか、それは自分にとって楽しいことなのか、など子どもの情動に寄り添い、そのことを自覚化させる試みです。このことを通して探究を自分ごとにするとともに、次の探究への足がかりとすることができます。

三田 大樹

2017年11月11日取材時
新宿区立大久保小学校
主幹教諭

my belief

ピンチこそチャンスである。直感を信じアイデアで打開する。



になるスポーツを考案する、という明確な目的があるからだと思うんです。「このことを明らかにしないと前に進めない」という問題を自覚して、なんとかしてそこを突破して、問題を解決しようという姿勢をすごく感じましたね。

三田 「やりたいこと」を明確にすることによって、今の状況が客観視できる。「やりたいこと」が明確じゃないと、できる・できないもわからないから、モチベーションも上がりがいいということですね。

鈴木暁範 以下鈴木(暁) 私も最近の単元で、すごいなと思ったことがありました。ミツバチを飼ってハチミツを採って、それを通して、地域の環境を学んでほしいと思いい、実践を進めていた時のことです。横浜の南区って緑被率(土地の面積に対する緑で覆われている面積の割合)が小さくて、横浜市の中でも下から4番目だったと思います。子どもたちも「自然が少ない」という認識でした。それでもこの活動で5kgほどのハチミツが採れたんです。そのことで、こんなにハチミツが採れるくらい自然があるんだということに、気付きました。そのとたん、ただハチミツを配るんじゃなくて、こんなに自然があるんだということに、地域の人も目を向けてほしいという思いをもつ子どもが増えて……。そのことに気付いてもら

うイベントを開くことになっていったんです。

でも、実際にイベントに向かうと、食べてもらうことに夢中になってしまつて、どんなクッキーをつくるかとか、どう味わつてもらおうかとかというところに気持ちがいってしまいました。結局子どももって当初の目的を、過程の中で忘れがちで、どう楽しんでもらうかということにとらわれてしまつてです。でも、一人の子どもが「俺たちのグループは、みんなで決めた目的に近づいていない。このままいくと失敗する」と言つてくれました。ふだんは結構斜に構えているような子なんですけど。正直私の想定では、一回目は地域の自然が伝わるものにはならないと思つていたんです。でも、その男の子は、「先生、ぼくはこれを見せたいんだ」と言つて、1日で地域の蜜源を紹介する映像をつくって持ってきました。(映像を見ながら。P1、右上写真今食べていただいたハチミツのものは?とか。

映像のつくり方も何も教えてないのに学校にiPadを持ってきて、今までみんなで探検した時の写真が欲しいと言ってきたんです。自分で映像をつくって持ってきて、「こういふのを見せたい。自分たちのグループの目的を叶えるためにはこれが必要なんだ。みんながハーパーサルでは取り入れてなかったことを是非やらせてくれ」と。

私が考えている授業づくり、それは、一言で表せば、「どんな姿を目指し、何をすべきかを明確にしていくこと」だと思っています。その目指す姿、本時目標を設定するにあたっては、「そもそも今何のために何をしているのか」ということを意識することが重要です。そのために、まずは70時間の単元全体の目標は何だったのか、今行っている10~20時間程度の小単元の目標は何であったか、ということ俯瞰して考えます。それをもとに、子どもの今の状況についての見取りと照らし合わせながら本時目標を設定し、そこから、資料やグループ、場の設定等の手だてを考え、本時案に集約していきます。本時目標に迫っていけば問題ないのですが、実際には、子どもの活動や思考が、計画とズレていくことがほとんどです。でも、小単元目標や単元目標というものに少し立ち戻って考えることで、ある程度の幅をもって柔軟に授業がつくれるのではないかと考えています。大事なことは、とにかく「何のために何をしている授業なのか、この1時間がどこにつながっていくのか」ということを、教師自身が自覚していることではないかと思っています。

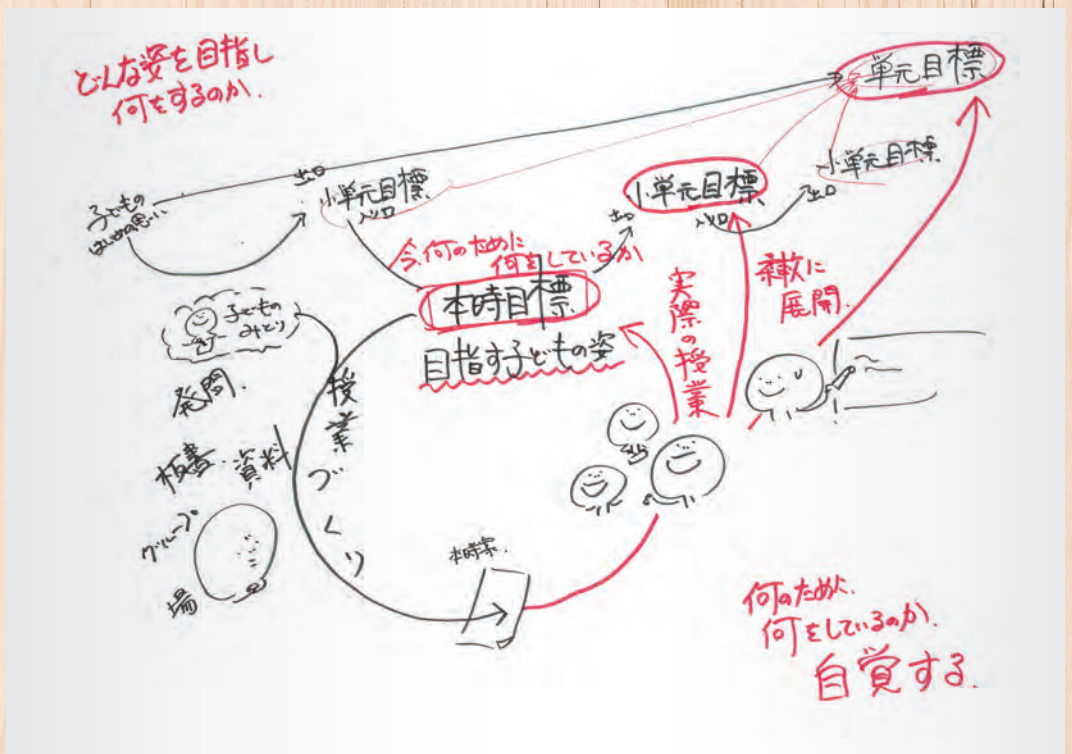


鈴木 紀知

横浜市立戸部小学校
主幹教諭

my belief

子どもありき! = 子どもがやりたいこと、子どもにとって意味・価値のあることを第一に!



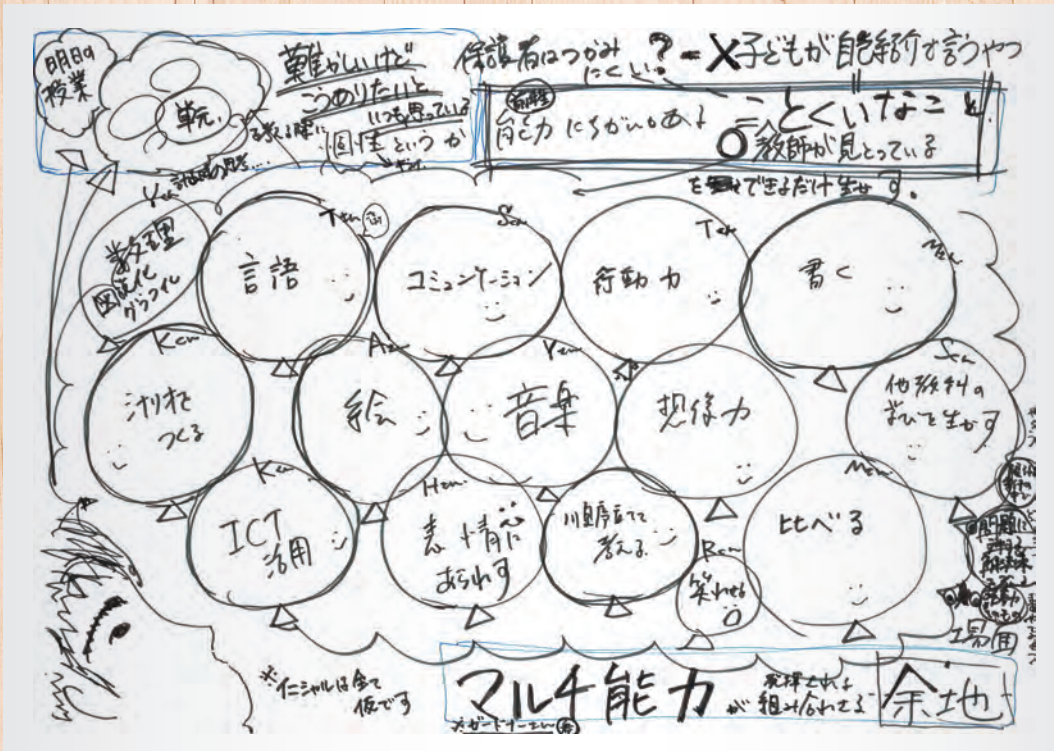
明日の授業をつくる時も、単元をつくる時も、常に考えていることです。難しいですが、大切にしたいと思っていることは、子どもの得意なことを生かすということです。得意なことというのは子どもが自己紹介で言う得意なこととかではなく、教師だからこそ気が付ける社会的な暮らしの中での子どもたちの能力、皆一つはあると思います。それをまず見つけて、できるだけ生かせるような場面をつくれるように考えています。問題に対する解決策を考える時、解決策が見つかってさあやってみよう！という時、あとは限られた条件の中でどうにかしようという時に発揮されると思っているので、そういう場面を意図的につくることを心がけて学習計画をたてています。

鈴木 暁範

2017年11月11日取材時
横浜市立大岡小学校
主幹教諭

my belief

至誠。どんなときも、大人にも子どもにも誠実でありたいと思っています。



「やりたいこと」や「問題」が明確になると
子どもたちは本気になって考えますよね。

さすがに「それリハーサルでやってないからだめだよね」とは言えなかつたです(笑)。

一同 すごい!!

(映像をパソコンで見せながら)

鈴木(暁) 「ミツバチが1日に運んでくる蜜の量は0・25gだからわかりやすいようにしました」とか言って、蜜を採った花から巣箱まで、自分をミツバチにたとえて歩くんです。何の映像編集指導とかもなくここまでやってきたんです。子どもたちは実は技能としてはものすごいものをもっているんだなと思いき知らされて。今回子どもたちが制作したパンフレットとかチラシを地域の人に「あれ全部先生がつくったんでしょ?」って言われて(笑)。実は、教師が何の手も入れてなくても、子どもが家でパソコンとかでつくる技能や能力ってかなり私たちに近づいているんですね。

明確に「これがやりたい」とか、「自分の力ついでここで生かせるんだ」という思いがあると、家に帰ってから、すべての時間をこれに使おうとするんだと。まあ、私はふだんの子のそのことを知っているから感動するんですけど、完全に想定を超えてきたっていう感じがあ

りましたね。

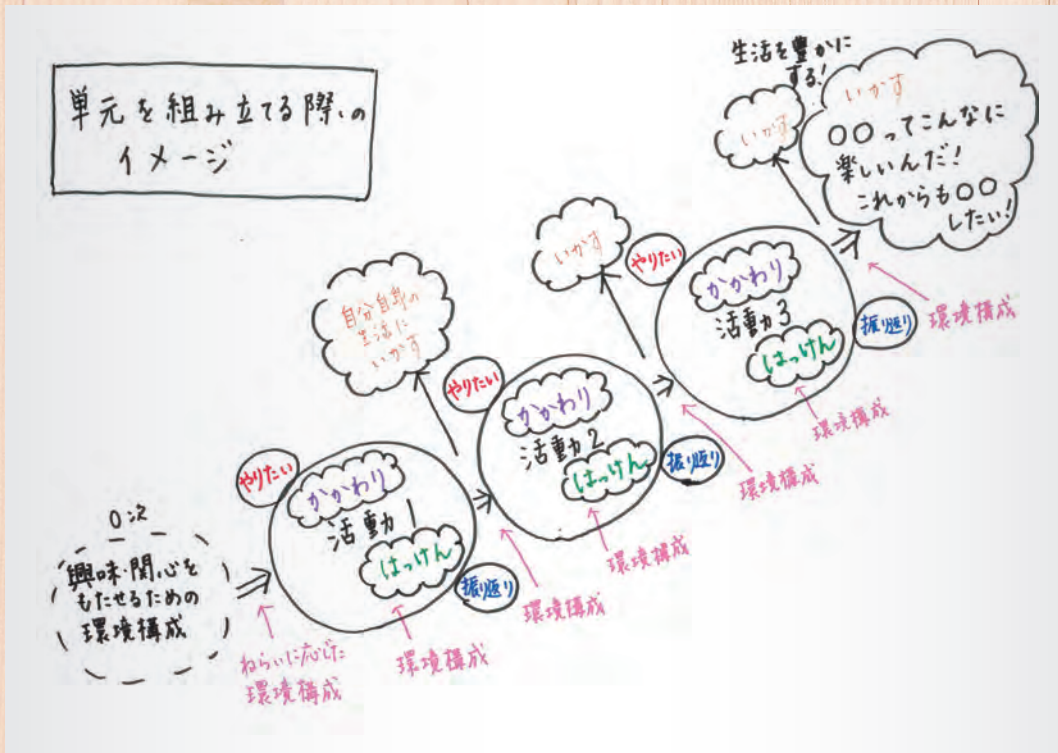
三田 もちろん子どもは信じているけれど、どこかにぎつとわかないだろうとか、まだ、難しいだろうとか。

鈴木(暁) そうそう。

三田 でもそうじゃないこともたくさんあって、今のお話のようにICT(情報通信技術)の活用などにおいて、実は、私たち教師よりも知識や技能をもっている子どもは少なくない。活動のねらいに合った本気を一層引き出すためにも、目の前にいる子ども一人ひとりの能力や可能性を再認識していくことも大切になりますね。

さて、一通りお話を伺いました。子どもたちの学びを本気にさせるために、日頃工夫していること、意識されていることなどあれば、若い先生向けにお話ししていただけないでしょうか。

鈴木(暁) 私は一回目は失敗でいいと思っています。立ち止まってこれじゃダメだと考えさせる場面をあえてつくって、学習になることを仕組んでいくんです。けれど子どもたちがその前に気付いてしまつて、これじゃあ学習にならないっていうことも結構あります。だから若い先生の実践の方が見



小笠原 さちえ

大田区立久原小学校
主任教諭

my belief

「笑う門には福来たる」周りの人にも福が訪れることをいつも願っています！



私が単元を組み立てる際には、このようなイメージ図を頭の中に描いています。まずは、「〇〇ってこんなに楽しいんだ、すてきなんだ」「これからも〇〇していきたい」など、単元が終了したときに、こうあってほしい子どもの姿をイメージします。そのために、子どもたちが興味・関心をもてるような環境構成をします。そうすることで、子どもたちから「やりたい」が生まれ、活動が始まります。身近な人や物、社会や自然とのかかわりがあり、その中で「発見」が生まれます。活動の終わりには「振り返り」があり、「発見」を深めたり、次の「やりたい」が生まれたりします。また、自分自身の生活に「生かす」ことにもつながります。このような活動を繰り返し、積み重ねていくことで、「〇〇ってこんなに楽しいんだ、すてきなんだ」と感じ、「これからも〇〇していきたい」という、自立し生活を豊かにすることにつなげていきたいと思っています。

ていておもしろいというか、わざと失敗させるんじゃないかと、普通にそのまま行っちゃうから、初任の先生とかすごくおもしろいですね。

小笠原 私は、生活科の学習では、思いや願いをもつことができるような環境構成であったり、学びを深めることができるような環境構成を心がけています。例えば、何か困ったことが起こったときに自分からすすんで本で調べられるように近くに本を置いておいたり、ゲストティーチャーなど相談できる人と出会えるようにしたりとか。

また、子どもたちがよりよくしようという場面、たとえば自然や物を使った遊びなどでは、いろいろな物の中から自分で「これがいいかな」と、考えて工夫することができるようになるように様々な素材や大きな物を置いておきます。「これを置いておいたら、明日は、あの子がこんな工夫をするかな」と考えて、1時間ごとに環境を変えています。また、どの単元でも自然と子どもどうしのかかわりが生まれるような環境にしたいと思っています。

いくのか……」みたいなことを、子どもが自分の言葉で語れることが重要だと思うし、子どもがそうなっているか、ということは常に意識していますね。実際、子どもから「本気」が感じられない時は、そのあたりが曖昧になっていることがほとんどです。うちの学校では「学級総合」にこだわり続けていて、難しさはあるんですが、それは「何のために」の一番根っこ部分を子どもたち自身で決めることが、学習活動の柱や原動力になると信じているからなんです。学校や地域によって特性があると思うので、そのやり方が絶対ではないと思いますが、学年や学校でやるのが決まっていますが、**三田**、そして、そもそも、何のために何をしているのか」を子どもが思いをもって自覚できるように支援し、そうになっているかを意識し続けることが大事なのかなと思います。

三田 先生方、貴重なお話をありがとうございました。さて、最後に、生活科や総合的な学習の時間の指導に日々取り組んでいる全国の若い先生に向けて、先生方が、これまで培われた単元づくりや授業づくりのポイントを図に示してプレゼンしてください。ここだけのとっておきのポイントをお願いいたします。

※P255、各先生の図と文、及びAR動画。必見です!!

Curriculum management seminar

村川先生のカリキュラムマネジメントゼミ



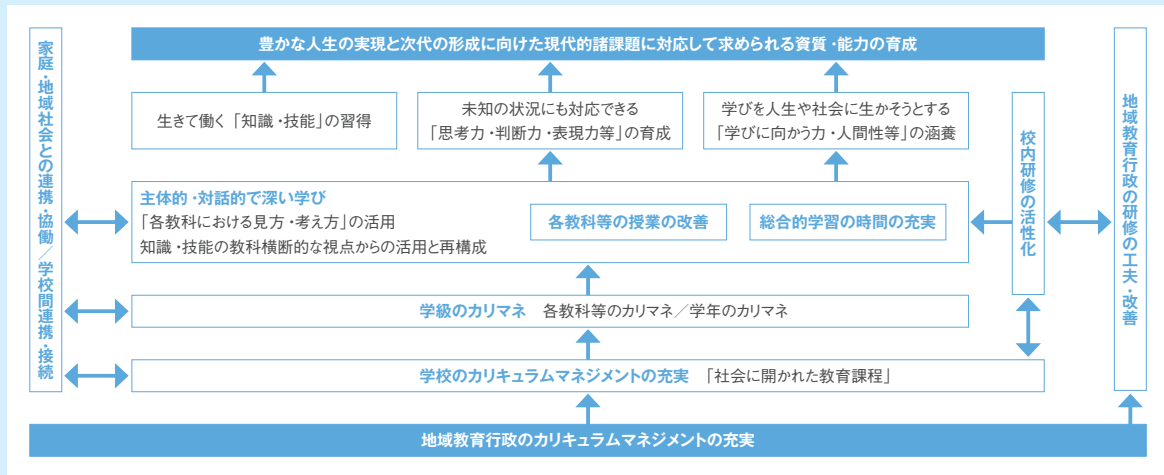
村川 雅弘

甲南女子大学教授、鳴門教育大学
名誉教授・客員教授。専門は教育
工学、カリキュラム開発、生活科・総
合的な学習。近著に『ワークショップ
型教員研修 はじめの一步』（教育
開発研究所）がある。

新学習指導要領が目指す教育実現のための 地域のカリキュラムマネジメント

新学習指導要領では様々な実践課題の実現を求めているが、個別に対処しようとせず、総合的・関連的に捉え、取り組

むことが重要である。



今次改訂では、「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」「カリキュラムマネジメント（以下、カリマネ）」「各教科における見方・考え方」など実に様々なキーワードが登場している。中教審答申（2016年12月）では「教員研修自体の在り方を、『アクティブ・ラーニング』の視点で見直す」との指摘もなされている。いずれもこれまでの改訂で文部科学省が推進してきたこと、学校現場が取り組んできたことの延長線上にあり、各々が互に関連し合っている。

学校教育の最終ゴールは、子ども一人ひとりに「豊かな人生の実現や災害等乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」（『小学校学習指導要領』（p.19）等）を育むことである。中教審答申で示された、育成を目指す資質・能力の三つの柱「生きて働く『知識・技能』」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」を日々の各教科等の授業の改善や総合的な学習の時間の充実を通して育成することが求められている。

カリマネの要である授業の改善のポイントは、教科横断的な視点により編成された教育内容を「主体的・対話的で深い学び」の中で「各教科における見方・考え方」を働かせて学習することである。子どもたちが今後遭遇する諸課題はまさに教科横断的である。一人ひとりが諦めることなく、様々な教科等の知識や技能及び見方・考え方を活用して、多様な他者との対話を通して解決していくことが求められる。日々の

授業はそのような考え方・生き方のできる子どもたちを育てていくことにつながっている。

このような授業を実現するには、教員の資質・能力の向上が求められる。「主体的・対話的で深い学びにおける子どもの姿とそのための手立ては」「各教科における見方・考え方の共通な部分と特有部分は」「教育内容を教科横断的にとらえるとは」といった具体的な研修課題が挙がってくる。校内研修の方法自体も「主体的・対話的で深い学び」であるべきである。

今次改訂が求めているのは「学校のカリマネ」であるが、これまでのように教務主任以上の仕事と捉えられないためにも、また教職員一人ひとりが「学校のカリマネ」を踏まえようと学級や教科指導で「学校のカリマネ」を着実に実現していくためにも、「各教科等のカリマネ」や「学級のカリマネ」が必要である。

一方、各学校が「学校のカリマネ」を実現していくうえで「地域教育行政のカリマネ」が求められる。「学校のカリマネ」のポイントの一つは、学校の中で「揃えるべきこと」と「揃えるべきでないこと」を明確にして共通理解を図ることである。「地域教育行政のカリマネ」にも両者が存在する。「学校のカリマネ」は子どもや地域の実態や特性に応じて各学校で策定され実現されるものであることは言うまでもないが、県や市のレベルで揃えるべきものがあると考えられる。例えば、指導案の形式や校内研修の方法を揃えることを提唱している。何より、育成を目指す資質・能力は家庭や地域とのヨコ連携、幼小中高のタテ連携での共通理解の下で着実に育み伸ばしていきたい。

野口先生のアクティブ・ラーニング教室



野口 徹

山形大学准教授。専門は生活科・総合的な学習。著書に『子どものくらしを支える教師と子どもの関係づくり』（ぎょうせい、共編著）など。

資質・能力が小学校以降の各段階につながる
幼稚園での「遊びこそ学び」

今春3月30日の高等学校の学習指導要領の改訂・告示をもって、幼稚園から高等学校までの全ての教育要領・学習指導要領が出そろいました。これらを買っているのが「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という、三つの視点です。今回の改訂で極めて大切にされていることとして、「何ができるようになるか」、いわゆる「資質・能力」が挙げられます。これには幼児期に育てた資質・能力が小学校以降の各段階につながることははっきりと示されているのです。幼児が毎日通う幼稚園での経験は、高等学校までの「学び」に直結している、と自信をもって伝えられるようになったことには大きな意義があることと思います。

では、まさに学びの入り口にあたる幼稚園では、どのような学びが展開されているのでしょうか。幼稚園で行われていることについては、案外知られていないかも知れません。

幼稚園教育要領の前文には、「これからの幼稚園」として次の内容が示されています。

学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようになるための基礎を培うことが求められる。

この文章では、幼稚園に一人ひとりの幼児に対して次のことが「できるようにするための基礎」を培うことを求めています。

- ① 自分のよさや可能性を認識する
- ② あらゆる他者を価値のある存在として尊重する
- ③ 多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える
- ④ 豊かな人生を切り拓く
- ⑤ 持続可能な社会の創り手となる

このようなことができるようになるために、どんなことを幼稚園では大切にしているのでしょうか。これについては、幼稚園教育要領の総則の「幼稚園教育の基本」に見ることが出来ます。ここでは幼稚園の教師に、幼児との信頼関係を十分に築くことと、幼児が身近な環境に主体的にかかわり、その環境とのかかわり方や意味に気付くことから、試行錯誤したり、考えたりする教育環境を幼児と共に創造することを求めています。また、幼児のそのような環境とのかかわりから生み出される遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である、として、幼稚園では遊びを通しての指導を中心としていくことを求めています。ここで示している幼稚園での「学び」とは、幼児が様々な環境とかかわることによ

って導き出す「遊び」である、つまり、「遊ぶことは学びだ」と定義づけているわけです。それでは、幼稚園で展開されている「遊びこそ学び」とは具体的にどのような実践になるのでしょうか。

そんなことを考えるときに、格好の対象となるのが山形県南陽市立赤湯幼稚園です。こちらは、ソニー教育財団が主催する「ソニー幼児教育支援プログラム」において、3年連続で「優秀園」として入選している、全国的にその取り組みが知られている幼稚園です。

赤湯幼稚園の子どもは、とにかく主体的に遊びます。その遊びの中で子どもが「あれっ?」「どうして?」「やってみよう!」という心の動きが現れてくるときに、そんな子どもの心を保育者がいかにキャッチするか。そして、それがより現れてくる環境の構成や援助はいかにあるべきか。これについて赤湯幼稚園では熱心に研究を重ねているのです。同時に、赤湯幼稚園では、子どもが遊びの中で感じた心の動きを口にするのを促します。それは子どもの大事な「はっけん」だからだ、と先生たちはとらえているのです。例えば、「色水あそび」を熱心に行っていた子どもたち。色のついた紙テープを指でちぎって水と混ぜて合わせていきます。それらをどんどん混ぜていくと、思いもよらない色が見えてきたりします。「なんで?」のつぶやきが生まれます。たいせつな「はっけん」は保存したい。ですからペットボトルに入れてみることを思いついたりします。今度はそのペットボトルに太陽の光を通してみます。「あれ?色が変わったぞ!」とさらに「はっけん」が導き出されるのです。このように、赤湯幼稚園の子どもは、遊びを通して次から次

へと新たな気づきを響かせていくのですが、先生たちはそこで止まりません。そんな気づきの瞬間を写真に撮り、掲示するのです。さらに、そこに子どもの気づきの言葉を添えていくのです。その子どもが字を書けるときには本人が書きます。もしくは先生が代筆することもあります。つまり、園舎の中は、子どもが精いっぱい遊びを通して気付いた姿と言葉で埋め尽くされているのです。赤湯幼稚園の子どもは、そんな掲示物を見ながら、新たな遊びの方向性や可能性を考えていきます。「今度はこれをやってみよう!」自分や友だちの姿や言葉は、そのまま「教科書」と同じ役割をしているのです。まさにこれが「遊びこそ学び」の姿なのでしょう。毎日の真剣な遊びで彼らは力いっぱい学んでいるのです。





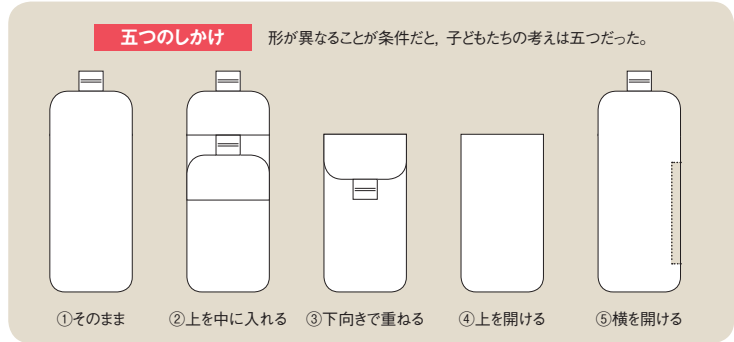
子どもたちは、
入り口の入りやすさに着目した。

1 単元の目標

「あつまれ！しぜんのひみつきちへ」は、新宮小学校の校庭にある「いこいの広場」を舞台に、身近な動植物の継続的な飼育や栽培を通して、その成長の様子に関心をもち、その過程で見つけた気づきをみんなで深めながら、自然認識や生命尊重の態度を育むことを目標にした単元である。

2 心の動きを伴った気づきを大切に

この単元で最も気を付けていることは、子どもたちの「気づき」を大切にすることである。新学習指導要領の解説に、「生活科の気づきとは、対象に対する一人ひとりの認識であり、児童の主體的な活動によって生まれるものである」と示されている。そこで、「あれ？」「どうして？」などの心の動きを伴った気づきが数多く見られるように、子どもたちが動植物とたつぷりと関わる時間をつくった。



① ペットボトルのしかけから

いこいの広場のそばに用水路がある。5月上旬、みんなで「春みつけ」に行ったところ、数人の子どもたちが又マエビとドジョウを見つけた。「つかまえない」と言い出す子どもたちに、数本のペットボトルを用意したところ、五つのしかけを考えた。

数日後、しかけを見てみると、③のしかけには、ドジョウ10匹とアカハライモリ1匹、④のしかけには又マエビが4匹、その他のしかけには、何も入っていないかった。

生活科 の 現場から

「あれ？」「どうして？」を みんなで深めたいな

～2年生「あつまれ！しぜんのひみつきちへ」の実践～
石堂 裕（兵庫県たつの市立新宮小学校）



広場には、絶滅危惧種をはじめ
貴重な動植物が集まっている。



隣接する市立図書館で、すみかやえさについて調べる。



話し合いコーナーに集まり、個別の付箋を整理する。

この結果を受けて、「なぜ」を問うと、数人が、「たぶん入り口が大きいからだと思う」とつぶやいた。そこで、この気付きをみんなの気付きにするために、全体で考える時間をもつ。まず一人ひとりが予想した付箋を整理し、それを

ひみつを探すため、休み時間も虫眼鏡で観察する子が増える。



撮影写真は説明する時のクイズに使用する。



「エビの赤ちゃんは、小さくても大人と同じだ」
「イモリの赤ちゃんにはえらがあるよ」

② ダンゴムシとワラジムシ
6月下旬になると、いこいの広場では、バッタやカマキリなどの幼虫を見つけることができる。子どもたちは、手のひらにのせて遊んだり、タブレットで撮影したりしながら、生き物とのふれあいを楽しんだ後で、気付いたことを付箋紙に書き出した。その中に、「ダンゴムシには丸まるものと丸まらないものがある」と書いた子がいた。みんなに「ワラジムシ」の存在を知らせる目的で、生活科の番組（NHK for school）を視聴し

とにみんなで話し合うのである。子どもたちは、自分たちが最も入ると予想した④のしかけとの違いに着目して、「③は、入り口が大きいから入りやすいけれど、出口が小さいからにげにくい」と結論付けた。
この話し合いがきっかけで、「飼育して、もっとひみつを調べたい」という思いを強くした。
ドジョウとヌマエビから始まった飼育だったが、広場で見つけたタガメやモリアオガエルのオタマジャクシなどが増えていくとともに、観察意欲も増えた子どもたち。そうなるに、脱皮や生き物の幼生を見つけることも多くなった。稚エビやアカハライモリの幼生など、虫眼鏡で対応できない場合は、顕微鏡を用意しておく、効果的であった。

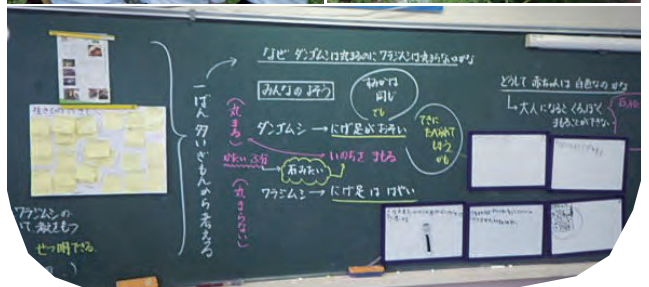
とにみんなで話し合うのである。子どもたちは、自分たちが最も入ると予想した④のしかけとの違いに着目して、「③は、入り口が大きいから入りやすいけれど、出口が小さいからにげにくい」と結論付けた。

その後、再びいこいの広場でたつぷりとダンゴムシやワラジムシと遊んだ。一人ひとりが事実を正しく理解するためである。
その後、気付きや疑問を整理する過程で、最も多かった「なぜダンゴムシは丸まるのかな、ワラジムシは丸まらないのかな」をみんなでも考えた。その結果、「ダンゴムシにはげ足が遅いけれど、ワラジムシにはげ足がはやいから」や「敵に食べられないように命を守るため」といった生き物の特徴や生態に関する意見へと深まっていった。やはり、個の気付きや疑問をみんなで共有する時間こそ、子

1年生が興味をもつように、具体物を見せながら説明する。



もたちの気付きの質を高める機会なのである。
③ アウトプットの機会として
たくさんひみつが集まると、子どもたちはそれを伝えたくなる。そこで、話し合った結果、1年生をいこいの広場に招待し、クイズ形式で伝えたり、つかまえた場所に飼育ボックスを置き、ふれあえたりするようにした。自信をもって伝える子どもたちは、まさに小さな研究者だった。
今後は、さらに季節ごとに生き物のひみつを集め、季節による違いにも気付けさせる予定である。



板書で比較結果を可視化すると、生き物の違いを理解しやすい。

主体的・対話的で深い学びの現場から

“四つの対話アイテム”で主体的に学び合う

学び合いのエンジンは
子どもたちの対話する力

江谷 鮎美
岡山県真庭市立中和小学校
教諭 3・4年担任



「おたすけしてください。」
四つの対話アイテムを使って自分たちで学び合う。

1 対話する子どもたち

3・4年生の総合では、子どもたちが新聞記者となり地域のお宝を探って新聞にまとめ、発信・交流していく。この過程でこれまでの体験をもとに地域のお宝、人と自然のありがとうのつながり、について編集会議を行った。

「昔は人と自然のありがとうのつながりがありがたたくさんあったと思う。」
「昔もありがとうのつながりがあったけど、今もありがとうのつながりがあると思う。」
「今はどんなありがとうのつながりがあるの？」

「今も自然が残っているから（人は自然に）ありがとうだと思う。」
「今は草を葉に使わないし牛も使わないから、今は昔に比べありがとうのつながりはなくなっただんじやないかな？」
「私はなくなつてないと思う。」
「昔はスイッチ一つでできるものがなかったから、ありがとうのつながりが多かったと思う。」

「二人は深い『おたすね』にこたえてすこいな。」
「ありがとう。」

これは、総合の整理・分析の授業における子どもどうしの対話である。子どもたちは、四つの対話アイテムを意識して対話している。四つの対話アイテムとは、「自分の考え」「いいとこ見つけ」「おたすけ」「おたすけ」の四つに整理した「対話の方位磁針」である。

教師は、子どもたちの対話を見取り、深めたい場面で学習者の一員として「おたすね」をする。また黒板に発言を整理し、不思議や気付きが生まれるような工夫をする。こうして四つの対話アイテムを意識して学び合うことで、子どもたちは受け身の学習から主体的な学習へと変化していった。

2 対話する力を育てるには

主体的・対話的で深い学びには一足飛びではたどり着かない。子どもたちが主体的に学び合うようになるために、四つの対話アイテムを活用して次のようなステップで対話する力を引き出し育てていった。

① 教師主導で対話をつなぐ

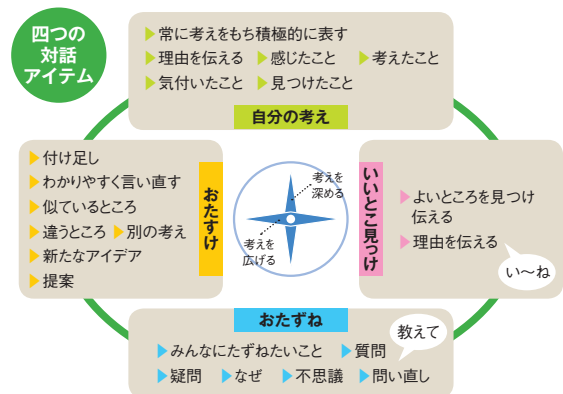
「先生からおたすねがあります。」この考えの良いところを教えてください。」など、まずは教師が対話アイテムを意識的に授業に取り入れた。教師主導の学び合いの中に対話的な要素を取り入れたのだ。子どもたちは教師に促されながら発言をつなぎ始めた。

② 対話のハンドルを渡す

ここから発想の転換がある。教師は子ども自身が発言をつなげようとする姿を辛抱強く見守り、励まし続ける。「〇〇さんの考えを聴いて、みんなはどう？ いいなと思うことはない？」「おたすねしたいことはありますか。」など、学びの主体は子どもたちであることを

主体的な対話を促す「対話の方位磁針」

子どもたちの主体的に対話する力が学び合いを高める



意識してはたらきかける。帰りの会や掃除の振り返りなどで「いいとこ見つけ」を取り入れ、何でも言える学習集団づくりも行った。

③ 子どもどうしの対話を育てる

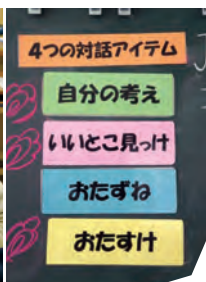
「友だちの考えをよく聴いているね。」
「おたすねをしら深まったね。」
「自分の考えしか発言がなかったね。おたすねやおたすけに挑戦してみよう。」授業の中で対話アイテムを使った学び合いが見られるようになってきた段階で、教師は授業における対話の質や構造を見取り、学び合いの姿を子どもたちにフィードバックしていく。そうすることで学び合いを子どもたちのものにしていった。

④ 深い学びに向かう

四つの対話アイテムで対話を引

「どうして、ありがとうのつながりがあると思うの？」「記事のこの部分には牛や馬のおかげで生活できたと書いてあるからです。」

黒板にアイテムカードを貼って活用をうながす。



自分の考え おたすね
自分の考えを伝えたり、理解するためにわからないことをたずねたり、疑問を全体へ投げかけたりすることで、考えを深めることができる。

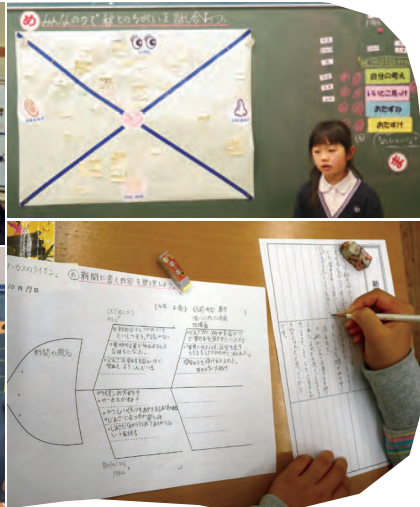
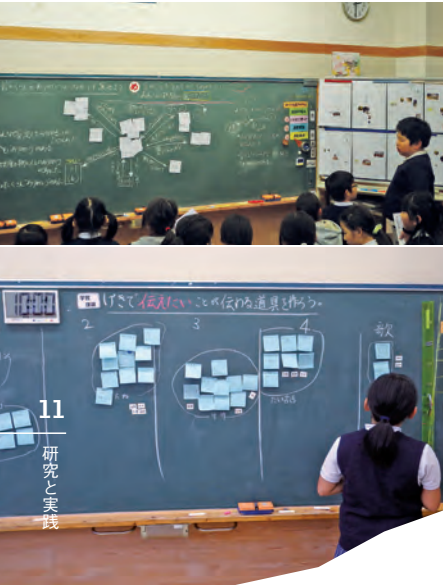
いいとこ見つけ おたすけ
友だちの考えのよい所を見つけて伝えたり、友だちの考えに付け足したり、自分なりの言葉で言い直したりして学び合いをたずねることで考えが広がり、活発な対話が生まれる。

1時間の授業における探究と学び合いの過程

| 学習形態 | 個人の探究の過程 | 子どもの姿 | 教師の役割 |
|------------------|------------------------|---|---|
| クラス全体 | 1.課題を知る・めあてをもつ | 学習課題に対して探りたいことや挑戦したいことを文に表し伝え合う。 | より主体的・探究的な学習を行うために、常に一人ひとりのめあてと、振り返りのある授業を行う。 |
| 個人 | 2.自分の考えをもつ | 気付きや自分なりの考え、疑問などを、これまでに得た知識を活用して言葉や文に表す。 | 課題解決のために情報を収集し、自分なりの考えをもち、表す姿を見取る。教師と子どもとの対話的な関係を大事にししながら必要に応じて支援したり励ましたりする。 |
| ペア・グループ クラス全体 | 3.学び合う (他者との対話) | ①自分の考えを表す。 ②お互いの考えを理解し合う。 ③考えを広げたり深めたりする。 | より主体的・対話的に学び合えるように「四つの対話アイテム」を活用し、子どもどうしの対話を促す働きかけをする。深い学びに向かうための働きかけをする。 |
| クラス全体 | 4.まとめる・振り返り (自己内対話) | めあてに対する自身の学びを振り返り、気付きや問い直し、さらなる課題等を文に表し伝え合う。 | めあてに対する学びの深まりを見取り、新たな疑問を育てる。子どもの学びの足跡（ノート等）に新たな疑問を育てるコメントや、学び合いの姿の評価や励ましコメントを書き、探究する意欲を継続させる。 |

ありがとうのつながりを深める編集会議
子どもたちの学び合いが黒板に表されている。

理科でも対話
思考ツールを併用すると気づきや不思議がうまれやすい。



国語の学習
新聞に書く内容を整理するために思考ツールを活用。

「同じ仲間とわけると?」「それぞれの場面に必要な物ははだいたい一つずつだね。」

いいとこ見つけは「書く」「書いて渡す」
「言葉で伝える」とステップアップ。



掃除のあとの振り返り
「雑巾がけをていねいにしているいなと思いました。」「ありがとう。」



新聞記者として「ありがとうのつながり」を探り新聞に表す。

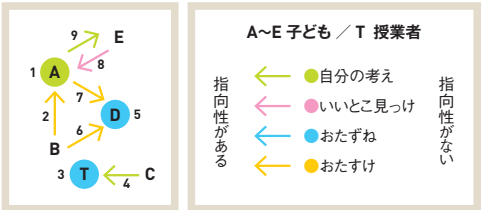
授業「昔のありがとうのつながりを深めよう」(総合的な学習の時間)

全体で話し合う場面での子どもたちの学び合い

子どもたちの対話の一部

- A1: 昔は人と自然のありがとうのつながりがたくさんあったと思う
- B2: 昔もあったけど今もありがとうのつながりがあると思う
- T3: 今はどんなありがとうがあるの?
- C4: 今は自然が残っているから人は自然にありがとうだと思う
- D5: 今は草を葉に使わないし牛も使わないから今は昔に比べありがとうのつながりはなくなったんじゃないかな?
- B6: なくなってないと思う
- A7: 昔はスイッチ一つでできるものがなかったからありがとうのつながりが多かったと思う
- E8: 二人は深いおたずねにこたえてすごい
- A9: ありがとう

対話の構造 (四つの対話アイテムによる分析)



3. 四つの対話アイテムの可能性

日々対話アイテムを活用していき出すことと並行して、思考ツールを活用したり学習形態を工夫したりした。思考が可視化されることでより「おたずね」や「おたすけ」が生まれやすくなり、学びに広がりや深まりが出てくる。教師は子どもたちの力を信じることで、豊かな学びに向かっていく。

くことで、子どもたちや教師に様々な変化が現れた。そこから四つの対話アイテムの可能性が見えてきた。

一つ目は「子どもの主体性を高める可能性」。自分の発言が「いいとこ見つけ」で認められたり、「おたすけ」でつながったりすること、「考えを伝えたい」「友だちの考えを聴きたい」という主体性を高めることができる。

二つ目は「聴く力を育てる可能性」。ノートに何も考えが書けず発言も少ない子どもが友だちの考えを四つの視点で聴き、ノートに矢印や「おたずね」「おたすけ」とメモを始めた。これは友だちの考えを理解しようとする懸命な聴こうとしている証だ。

三つ目は「教師の意識を変える可能性」。「授業をどのように進めようか」「どのように教えようか」から「子どもたちはどのような発言をして対話をつなこうとしているのか」「対話を引き出すための教師のはたらきかけは何か」に意識が向き、子ども主体の授業づくりへと変わる。

その他にも四つの対話アイテムは、自己内対話を促す視点になったり、思考ツールを組み合わせた活用でさらに深い学びに向かったりする可能性がある。今後も引き続き実践と研究を重ね、対話的な関係の中でもによりよく生きる子どもたちを育てていきたい。

ご当地 キャラ

Character

旭川市
シンボルキャラクター

あさっぴー

旭川ラーメン
おいしいよ

北海道

今回は、北海道旭川のご当地キャラとご当地料理をピックアップ！
豊かな自然に恵まれた、北北海道の拠点都市・旭川市のご当地情報局です。

旭川ラーメンとは…

旭川の気候風土から生まれた味、「旭川ラーメン」。
現在の旭川ラーメンの原型ができたのは、昭和22年頃。旭川では養豚が盛んで豚骨が手に入りやすいことに加え、物流の拠点で煮干し等も豊富にあることから、豚骨と煮干しなどを合わせてだしをとるダブルスープが誕生しました。さらに醸造業も盛んであることから、しょうゆ味が基本となりました。一方、地元の製麺業者がスープとよく絡む麺を開発し、現在の旭川ラーメンへとつながっています。旭川ラーメン店は市内で150軒以上がしのぎを削っていますし、専門店だけでなくも現在市内には400近くの店がラーメンを提供しているといわれます。伝統的な旭川ラーメンを提供する店がある一方、独自の味を追求する店もあり、市民は様々な旭川ラーメンを食べ比べ、親しまれています。

特徴

- 豚骨をベースに、煮干しやかつお節、コンブなどでだしをとったダブルスープが原型。
- 麺をつくる際に水をあまり加えないので、スープが麺によく絡む。縮れ麺を使う店が多い。
- 寒い旭川では、ラーメンが冷めないようにラードで表面を覆う工夫がされた。



市内の小学校2年生が生活科の「町たんけん」で地元の老舗ラーメン店「つるや」を訪れ、旭川ラーメンの魅力を調査しました！老若男女を問わず地域の皆さんに愛される旭川ラーメンです。

プロフィール

赤いマフラーは
ヒーローの
しるしだよ。



| | |
|--------|------------------|
| 名前 | あさっぴー |
| 誕生日 | ひみつ |
| 出身地 | 旭川 |
| 所属 | 旭川市 |
| 性格 | ナゾ |
| 好きな食べ物 | 旭川ラーメン |
| 楽しみ | 旭川のハッピーを 見つける |

名前の由来

あさっぴーはもともとゴマファザラシの男の子。ある日の事、あこがれの存在だったホッキョクグマの姿に変身し、「あさひかわ」の「ハッピー」を願うヒーロー「あさっぴー」として誕生したんだよ。

子どもたち、先生へのメッセージ



- 大自然と冬景色
 - 人気の旭山動物園
- 一年通して楽しめる旭川に遊びに来てね!

主な活動

- 旭川の魅力を伝えるためのPRをすること。時には道外でも活動する。
- イベントに参加すること、旭川市と近郊市町の祭りやイベントの盛り上げ役をする。



ご当地料理

Dishes

みんな大好き
旭川ラーメン

旭川の気候風土から生まれた味

旭川ラーメン

保幼小交流の二つの要素

はじめに

保幼小交流を、年長児の円滑な就学と幼児教育から小学校教育へのつながり方で考え、幼稚園からの視点を入れて考えてみた。

キーワードは連携・共育・接続

① 連携

幼稚園と小学校の教師どうしが相手校（園）の教育観や子ども観教育の方法や教師のアプローチの仕方などを相互に理解し合う。特に小学校教諭の幼児教育への理解を進めることが大事で、かつて指導観の転換などと言われたが、カウンセリングマインドを生かした学習指導を考えていかなければならない。教師が変われば、教育の方法も変わってくる。

そのために研究会では、全体会として交流関係にある学年やクラス

の教師と幼稚園の担任たち全員で、今年度のわらい・内容・方法・スケジュールなどについて計画を立案していく。直接交流する学年やクラスと幼稚園の打合せは分科



2年生の幼稚園訪問
「運動会の練習にきてください。」



5年生と給食体験
「かっぱう着を着せてあげる。」



4年生なかよし大作戦
「葉っぱで虫とりしよう。」

幼小合同での学習活動計画例

| 5歳児 | 主な活動 | 5年生 |
|---|--|--|
| 【わらい】 ◎5年生と給食等を通して交流することで、給食への不安感をなくす。 ・学校に親しみをもち、就学に期待感をもつ。 ・給食の食器等に触れることで使い方がわかる。 | ◎よろしくね!! ・通用門でお迎え。 ・ランチルームに案内。 ◎給食の前に! ・ランチルームで名札づくり。 ・給食マナークイズ3択。 (ぐるぐる食べ、牛乳先のみ、好き嫌い食べ) | 【わらい】 ◎給食が楽しい時間になるように工夫することができる。 ・給食の仕方について、園児にわかり易く伝えられる。 ・実行委員が中心になって運営することで、リーダーシップとメンバーシップの育成を図る。 |
| 教師の手立て・留意点等 ◎園児の様子を見て緊張感のある子どもなどに不安がないように巡回する。 ・時には5年生にお願いする。 ◎メニューで好き嫌いや牛乳が飲めない子など個々に対応していく。 ◎園児の姿を見守り、必要に応じて対応していく。 ◎給食の片付けを5年生とともに行うにあたって、個別の対応が必要な子どもについては5年生に知らせていく。 ◎園児から感想を聞きだす。 ・5年生に感謝の気持ちを伝えられる。 ☆(評価) 5年生と会話をしながら給食を楽しむことができる。 ☆振り返りや感想が言える。 | ◎一緒に食べよう! ・お盆や食器の扱い方を教える。 ・園児も自分でビュッフェで配膳する。 ・準備15分。 ・食事30分。 ・片付け10分。 ・園児も一緒に使った食器類を片付ける。 ◎またね! ・振り返り。 ・メッセージメダルのプレゼント。 ・わかれのあいさつ。 ・通用門までお見送り。 ◎学校を出発。 ◎園・学校に帰って振り返りをする。 | 教師の手立て・留意点等 ◎園児の気持ちになって考えさせる。 ・不安そうな子。 ・好ききらいのある子。 ◎困っている園児がいないか気配りができるようにする。 ◎園児たちとかかわれるように促す。 ◎時間の配分に気をつけさせる。 ☆園児を楽しませたり、困ったことに応えることができたか。 ☆給食の仕方について伝えられたか。 ☆園児に親しみをもつことができたか。 ◎児童はカードなどで振り返り。 |

会として位置付けていく。

② 共育

幼小相互の子どもたちがともに育つことを願って進めることが大切である。

そのために小学校では生活科や総合的な学習の時間に位置づけることや、幼小合同で学習活動計画を作成していくことも有効である。

交流の導入

協同で交流計画を立案していく。出会いを大切に「さんぽ」から。2年生は地域探検の中で幼稚園児と交流を進め、幼稚園児は小学校を意識して、まず身近な低学年との交流を好奇心と期待感をもって始めていく。

【2年生の地域探検の導入】

・「地域のさんぽ」の中で、幼稚

園を訪問する

- ・園児たちと一緒に遊具で遊ぶ
- ・小学校の春の運動会のお知らせをする
- ・運動会の練習に来てもらおう
- ・年長児が低学年の運動会練習を見学に行く
- ・慣れ馴染む段階である
- ・子どもたちにとってさりげない出迎いを重ねていくことで、児童と園

児たちの中に次第お互いを意識する気持ちが芽生えてくる。

③ 接続

幼小相互に理解が進めば、低学年はもとより、学校全体としても幼児教育を生かす視点が整い、新入児へのアプローチもギャップの少ないものになってくる。結果的に円滑な接続が可能となってくる。そしてそれは、入学当初だけに限らず中学年にも受け継がれていく。(小学校学習指導要領・学校段階等間の接続)

次に、幼稚園児にとって、円滑な接続に向けて必要な場面を考えた。

生活・総合への提言

幼児と児童がともに育ち合うための、学びある連携・共育・接続

知る⇨かかわる⇨慣れる

空間的、時間的、人的、心理的、内容的の違いを知ったり気付いたりすること。

・いわゆる、校庭の広さや体育館の大きさに驚くようなことである。先程の慣れ馴染む段階である。

これらの環境を活用する、利用

する、体験することで、運動場や体育館で走ってみたり遊んでみたりする。場や人と一緒に遊んでみる。場を活用することである。

慣れる

これらの環境に慣れる。繰り返し行ってみる、やってみる、何度か運動場で遊んでみる等。

休み時間に来てもらって一緒に遊ぶ。2〜3回目の給食体験に招待する等である。

ひばりのねがい

環境にかかわる

幼→小

- 運動場でかけっこ体験
- 小学校の探検
- 5年生に学校の秘密を教えてもらう
- 校庭で遊ばせてもらう

一緒につくる

幼↔小

- プールで一緒に遊べるといいな
- 他学年と給食体験
- 虫をとって飼おう
- 野菜→調理→食べる
- 引き取り訓練と一緒にやる
- 七夕飾りを作る
- 音楽を聴く、演奏する。歌う・踊る
- クリスマス会をしよう。飾りを作る

お互いの先生へ

幼↔小

- 交換授業をしてみる
- 小学校の先生に絵本を読んでもらう
- プチ授業をしてもらう
- 小学校の先生に園児と遊んでもらう
- まだ園児が落ち着かない時に保育参観に来てもらう(4~5月)
- 幼稚園の運動会に来ませんか。ついでにお手伝いも……

幼小の交流

~してもら

幼←小

- 学校のことを教えてもらう
- 絵本を読んでもらう
- 公園と一緒に行ってもらう
- 小学校のお祭りに招待してもらう
- 一緒に栽培して食べよう
- 運動会に備えて、綱引き・玉入れの仕方を教えてもらう

お兄ちゃんお姉ちゃんにしてあげる

幼→小

- ひばりの秘密を教えてあげるクイズ
- お祭りに来てもらいポップコーンをあげる

学校という環境について知って使って繰り返し馴染んでいく。これで環境と人にかかわり慣れていくと考える。

【4年生なかよし大作戦】

- 園児たちとなかよくなる
- 学校の草原で虫取り
- 遊具で安全に遊ぶ
- 振り返り〜喜ぶことを考えよう
- 二度目のなかよし大作戦
- 昔の遊びを教えてあげる
- 楽器を紹介しよう
- 振り返り〜園児に聞いてみよう
- 三度目のなかよし大作戦
- 聞いてもらえる工夫をしよう
- (園児からのお礼の劇を見る)
- 好きな子と遊ぼう
- 4年生とは年間シリーズでかわつた。回数を経るごとに双方の子どもの意識が高まり、集団から個々のつながりへと移っていった。

【5年生と給食体験】

- 幼稚園に給食の招待状を出そう
- 皆で遊ぼう
- 一緒に給食を食べよう
- 給食クイズで給食を教えよう
- 二度目は一緒に配膳しよう

・かっぱを着て園児もお手伝い

- 個別のものを配膳しよう
- みんなで振り返ろう
- 来年会おうね

5年生の給食体験は、初めは招待され、二度目はお手伝いもする。

就学に向けて、興味と不安がある給食への心配を軽減し、来年の6年生との出会いに期待をもてるようにする。

では教師間はどうなかわかりが必要だろうか。

場⇨環境⇨方法

場とは

幼稚園教諭が小学校の学習活動、教科学習、特別活動、行事、清掃、給食などの様々な活動の場面に就いて知る。小学校教諭が幼稚園の毎月のお誕生会や様々な行事について知る等。

環境とは

人的(先生・児童数・様々な特徴)・物的・時間的・空間的(広さ・高さ)の違い。

教育の方法とは

指導と支援。委任と教示。言葉

つかい。かわり方。受容的か強制的か。園と学校との文化の違い……それぞれ特有の価値観・指導法・かわり方・子どもとの伝え方がある。お互いに公開し合い、見合う体験を通して相互理解を図る必要性がある。

おわりに

小学校の先生からは、「普段注意することが多すぎた、ゆったり認めていくことが大事だなと思っただ」という言葉が聞けた。

生活科や総合的な学習の時間を有効活用して、できるだけ単発で終わらない工夫と中高それぞれの子どもの違いを把握したかわりを進めることで、低学年及び小学校全体が変革できればと願っている。



元平塚市立ひばり幼稚園園長 小山 伸一

かわり場の場と段階



保育所、幼稚園の現場から

南陽市立赤湯幼稚園(山形県南陽市)

園長：佐藤みゆき

園児数：80名(満3歳児～未就学児まで)

7月1日現在

菊とぶどうといで湯の里「南陽市」。本園は開湯920余年を誇る赤湯温泉街の中心部に位置し、今年度、創立65周年を迎えた南陽市唯一の公立幼稚園である。また、公立幼稚園としては県内唯一の自園給食を実施しており、自園給食ならではのメリットを生かし、心と体を育てる食育活動に取り組んでいる。

南陽市を挙げて幼保小中一貫教育に取り組みながら、ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」をテーマに、日々の教育実践をおこなっている。

教育目標

「自分のことは自分でやる子ども」

「友だちと仲よく遊び、熱中する子ども」

「よく見、よく考え、よく表現する子ども」

「遊びの深まり」を大切にした本園の取り組み

本園では、全園児が同じ空間で自由に人や自然・物・事柄にかかわって遊ぶ環境の中で、保育者が子どもたちの「どうして?」と感じる心をキャッチして、子どもからの言葉や考えを引き出す声がけと、先を予測したわくわくドキドキするような環境構成を行い、四つの視点*「そうだ!」「どうして?」「こうしよう!」「もっと!」で遊びがさらに深まる過程を見取り、子どもの「やってみよう!」と工夫して意欲的に取り組もうとする姿につなげていくことを大切にしている。

研究のポイント

- 遊びを見取る目、声かけや環境構成の工夫等、保育者の感性と力量を磨く。
- 豊かな経験から得た子どもたちの気付きや発見を、子どもたちとともにドキュメンテーションし、発信。
- 垣根(官・民、幼・小、地区)を越えた施設間の交流と研修。

※ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」実践事例集 vol.13より引用

*本園がソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」に出合っ
て4年目。3年連続で「優秀園」を受賞。H30年6月、3回目の「優秀園
実践提案研究会」(公開研)を開催。県内外の幼児施設、学童
保育施設、小学校、中学校、大学等々から、総勢75名の教職員の方々が
参加。



「そうだ!こっちからのぞいてみよう!」



「どうして逆さまに見えるんだろう?」



「スイカの種を水に入れてみよう!」「浮く種と沈む種があるよ。」



「もっと上手につくりたいなあ。」



「沈んだ種の方がたくさん芽が出たよ。どうして?」



情報発信!保護者へ、地域へ、子どもたちへ伝えたい! わくわくドキドキな事たくさん。

好評
発売中

日文の書籍シリーズ

総合的な学習の時間の指導法

新刊

～教職課程コアカリキュラム対応 大学用テキスト 理論と実践の融合～



2019年度から教職課程を有する大学・短大で必修化される「総合的な学習の時間の指導法」。本書は、「総合的な学習の時間」の理論と全国各地の優れた実践を紹介した教育現場待望の一冊。大学での使用はもちろん、教員研修など現場の先生方にも最適。

編著 大学テキスト開発プロジェクト

定価 **2,484**円 (本体2,300円+税8%)

B5判 207頁 ISBN 978-4-536-60106-1

発行 日本文教出版



サクスタ

無料
配布中

地域や児童の実態を踏まえて、パズルを完成させるようなイメージでスタートカリキュラムを作成できる！

改訂版

サクスタ2

来春発行
(予定)

新学習指導要領のポイント、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿などを踏まえて、より使いやすく、現場に即してリニューアルします！

サクスタは日文Webサイト内で無料公開中！

日文 サクスタ 検索

※冊子をご希望の方は、小社大阪本社
業務部(TEL:06-6695-1771)まで
お問い合わせください。

監修 村川雅弘 和田信行

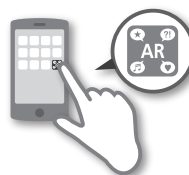
開発 八劔明美

お求めは、最寄りの書店でお願い致します。

※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる！

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを起動します。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 ARマークがあるページで紙面全体にかざすと、動画が始まります！



★P.2～5 (特集) で視聴できます。
※動画は、2019年1月31日まで視聴することができます。

理科 とつなく



「比較」で気付きを豊かにする。

POINT

1. 「比較」の見方・考え方を生かして自然の事象を捉える。
2. 諸感覚を用いて自然の事象の特徴を捉える。
3. 時系列で変化する事象は、その前後で「比較」の見方・考え方を生かして捉える。

「比較」の見方・考え方を生かす

子どもは無意識のうちに身の回りの物事を比べて、大きさの違いや変化に気付いています。「比較」は、生活にかかわる見方・考え方の一つと言えるでしょう。

単元「さかせて みたいな はな いっぱい」では、ヒマワリやアサガオ等、様々な種子を取り上げます。視覚や触覚等の諸感覚を用いながら「比較」の見方・考え方を生かして、種子の色や形、手触り等を捉えさせることで、気付きを豊かにすることができます。

発芽に伴う変化への気付きは感動的です。地面を持ち上げて子葉が開いたり、背丈がぐんぐん伸びたりする等、生長に伴う変化は、時系列の前後における「比較」の見方・考え方を生かして得られる気付きです。

小林 辰至

上越教育大学名誉教授。1952年、岡山県生まれ。専門は理科教育学。タンポポの教材化に関する研究で、兵庫県教育大学から博士（学校教育学）を取得。



生活科を

▶ 温かい仲間意識が「ジャンプ」を生み出す

子どもたちはグループごとに「まちたんけん」で地域の様々な人と交流をした。各グループはその交流を劇にして発表する準備を行った。最後に振り返りのシートが配られた。一人の男児が「ぼく、自分の名前、漢字で書くよ」と言い、集中して記入し始めた。隣や前の席の子どもがにこやかな表情で温かく見守っていた。

この男児は特別支援児である。授業後、担任は、氏名を漢字で書いたことは驚くべき成長だと述べた。生活科の活動で、みんなと楽しく頑張ったという意識が、自分も漢字で氏名を書こうという「ジャンプ」を生み出したのだろう。

自分が仲間として受け入れられているという連帯意識が、自分を高めようと努力する心の支えとなる。「公民としての資質・能力」は、子どもたちが相互に支え合い高め合うことを意識できる学習活動を通じて育成される。

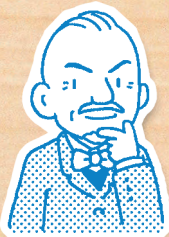


「まちたんけん」などの生活科の活動を通して、みんなと楽しく頑張ったという思いが「ジャンプ」を生み出す。

社会科 とつなく

POINT

1. 子どもたちに「みんなで楽しくて一生懸命」と実感させる。
2. 「自分たちでやり遂げる／やり遂げたい」という意欲を高める。
3. 活動の中でお互いの貢献を認め合う
言語活動の機会を生み出す。



藤井 千春

早稲田大学教育・総合科学術院教授。博士（教育学）。1958年、千葉県生まれ。茨城大学助教授などを歴任。ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。

生活&総合navi vol.75

日文教育資料[生活・総合]

平成30年(2018年)10月25日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。
Cover photo: KONISHI TAKASHI
Design: KURAHASHI JUNPEI (KN.PLANNING)
CD33425

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690